

日本アイ・ビー・エム(株) IBMフェロー

浅川

ASAKAWA  
Chieko智恵子さんに伺いました

聞き手

苗村 由美  
編集委員武居 秀訓  
編集委員[writer] 駒崎 文男  
[photo] 永田 正男

情報アクセシビリティの研究に取り組まれてきた浅川智恵子さんに、「土木インフラのアクセシビリティ」についてお話を伺った。

2010年6月9日(水)  
日本アイ・ビー・エム(株) 東京基礎研究所障がい者の情報源の拡大を  
目指して

——情報アクセシビリティということをご自身はどのようにとらえていらっしゃいますか。

浅川——社会とつながりをもつために、情報は大切な鍵になります。情報から閉ざされるということは、社会参加していくうえで、疎外感の原因ともなります。情報アクセシビリティというのは、情報へのアクセスが容易にできるということですが、簡単にホームページにアクセスできる、メールが読めるというだけではありません。それらが実現されることによって、ユーザーが社会につながっていくことができるという深い意味があるのです。

私は障がい者が社会とつながっていくこと

でアクセシブルにまちにでかけ、健常者と同様の機会を得られるようにするにはどうすればいいかということをご日々考えています。

——視覚障がい者向けウェブページ音声読み上げソフト「ホームページ・リーダー」を開発されたきっかけは何だったのですか。

浅川——パソコンやインターネットが普及する以前、私のような視覚障がい者にとって、情報は点字や録音図書などで、点字図書館を介して借り出すというのが一般的な方法でした。ですから、自分から情報を探すことができず、必要なときに必要な情報を得ることもできませんでした。

1994年、私はテキスト・ブラウザやテキスト音声合成システムといったソフトウェアを組み合わせ、ウェブ上のいろいろな情報を自力で調べて読む、という経験をしました。これはすばらしい経験でした。視覚に障がいをもったユーザーの方々がこれにアクセスできれば、

情報源が拡大できるのではないかと思ったのです。そこで、視覚障がい者が自宅でも簡単にインターネットにアクセスできるようにしたいと思い、「ホームページ・リーダー」を開発しました。

カーブカットの世界を  
ITの世界に

——今後のさらなる情報アクセシビリティの前進と、そのなかでの土木の役割をどのようにお考えでしょうか。

浅川——アクセシビリティという言葉は、障がい者や高齢者が特別な負担もなく、たとえば車椅子を利用した場合の建物などへのアクセスが容易にできる、といった物理的なアクセシビリティ(利便性)を指す用語として使われ始めたといわれています。歩道と車道の段差を解消し、スロープにすることを指す「カーブカット」は、車イスの方の移動のしやすさを実現す



### 浅川 智恵子(あさかわ・ちえこ)さん プロフィール

工学博士。1985年日本アイ・ビー・エム(株)入社、以来、同社東京基礎研究所で情報アクセシビリティ実現のための研究を主として実施。2009年、日本人女性で初めてIBM技術者の最高職位であるIBMフェローに就任。

**あきらめなければ道は開ける**

——最後に、女性技術者や若手技術者に向けたメッセージをお願いします。

**浅川**——私がモットーにしているのは、「あきらめなければ道は開ける」ということです。あきらめられないということは自分が目標をもっているということなんです。若い方と話をしていると、入社してこんなことを自分はやりたかったわけではないという人がよくいます。けれど、そこであきらめたら何にもならないですよ。たとえば、今の状況を「いい機会を得ているのだ」と発想を変えらることで、失望せずに自分が取り組んでいることへの誇りと「将来自分は絶対にこういう方向に行きたいのだ」という目標を常にもって、我慢強く取り組んでほしいと思います。そうすればきっと道は開かれます。自分には無理だ、ということは決してありませんから。

私自身、入社したときの目標を今ももち続けています。それは、情報源の拡大、職域の拡大、教育環境の改善という三つの目標です。高齢者、非識字者、貧困によりインターネットへのアクセスが困難な人びとが世界には数多くいます。誰もが等しく情報にアクセス・活用することが当たり前のようにできる社会、誰もがITを利用して能力を発揮できる社会を実現するためにも、この三つの目標をもちながらさらに努力を重ねていきたいと思っています。

——本日はお忙しいなか、ありがとうございます。

るために生まれましたが、実現してみると車イスの方だけでなく、自転車、ベビーカー、子どもや高齢者にとっても使いやすいものになりました。障がい者のためが、すべての人にとって「バリアのない世界」につながるこれが「カーブカット」という言葉には込められているのです。近年増えてきた駅のエレベーターも同じです。

今後、情報アクセシビリティにもどんどんカーブカットの世界を取り入れていく必要があると思っています。

また、IBMは、環境、エネルギーなど地球規模の課題をITの活用により解決し、地球をもっと賢く、よりスマートにしていこうという

「スマーター・プラネット」というビジョンを提唱しています。ITは、社会を支えるインフラとして発展を続けており、人もモノもすべてがネットワークによって相互接続される時代になりつつあります。本場に誰もが住みやすい社会を築くには、ITだけでは足りません。ITがソフトの基盤だとすれば、土木はハードの基盤です。今後ITと土木の関係はますます深くなると思いますし、両者の融合によってバリアのない世界、誰もが暮らしやすいまちをつくっていけるのではないかと思っています。